
悠久の仙人

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悠久の仙人

【Nコード】

N1731L

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

日常に疲れた剛はインドへ旅に出た。そしてそこで出会ったのは。インドを舞台にした作品です。

第一章

悠久の仙人

「疲れましたね」

南平剛はある日溜息と共にこんなことを言った。会社の帰りの居酒屋でのことだった。

不況だと言われているが彼の会社は業績を上げており多忙だった。まだ若い彼もそれで仕事漬けの毎日だ。それでつい職場の先輩にこんなことを言ったのだ。

太めの一直線の眉が時折上下に動く。引き締まった大きい口元にやや垂れているが奥二重の目は鋭い。髪は太く多いもので色は黒くそれをサラリーマンらしく丁寧に右で分けている。長身でスーツがよく似合っている。その彼が今居酒屋のカウンターで眼鏡をかけた小柄な先輩に対して言っていた。

「本当にね」

「そんなにか」

「最近アパートに帰って寝るだけですよ」

ビールを大ジョッキで飲みながらの言葉だった。

「ゲームする暇もありません」

「ゲームもか」

「はい、ありません」

ここでさらに溜息を吐き出す彼だった。

「最近残業ばかりですよね。しかも週六日で」

「そうだな。最近は特ににな」

「忙しいですよね」

また言う彼だった。

「とにかく」

「しかしそれで給料も増えてるし悪いことばかりじゃないじゃないか」

ここで先輩は笑って彼に言ってきた。

「そうじゃないか？御前だつてさ」

「成績を評価されてですね」

「その若さで今度あれじゃないか」

「こう言うのだった。」

「大阪本社で主任だろう？」

「まあそうですね」

実は彼の地元はそこだったりする。今彼等は東京の方に出向しているのである。そこで業績をあげそれを評価されることである。

「地元によく戻れたんですね」

「じゃあいいじゃないか」

また言う先輩だった。

「まあ俺は地元がこつちだしな」

「関東でいいんですか」

「ああ、俺にとってはな」

レモンチューハイを飲みながら話す。そのつまみは海老の天麩羅だった。そして剛の前にあるのはお好み焼きである。それを食べるがらだった。

「俺にはそのお好み焼きは合わないしな」

「僕もんじゃ駄目ですし」

「そうだろ？御前は関西向きなんだよ」

「そうだというのだ。」

「疲れたっていうのもあれだろ。関東だからじゃないのか」

「そうですね」

「そうじゃないのか。まあ今のプロジェクトが終わったらな」

「ええ」

「旅行でも行ったらどうだ？」

「このことを提案してみせたのだった。」

「ちよつとな」

「旅行ですか」

「ああ。何処か外国でも行って来たらどうだ」

「こう彼に言うのであった。

「ちよつとな」

「旅行ですか」

「結構好きなんだろう？旅行」

「ええ、まあ」

彼の趣味の一つだ。学生時代はあちこち旅をしたことがある。先輩の今の提案もそれを踏まえてのことであるのだ。

「それは」

「じゃあ有給取って何処かに行けばいいさ」

「何処かにですか」

「好きな場所に行けばいいさ」

「そこまでは問わない彼だった。

「それでどうだ？」

「そうですね。それじゃあ」

それを聞いて考える顔になる彼だった。そうしながらまたビールを飲むのだった。飲み干してしまったのでおかわりをする。

「そうしてみます」

「そうするといいさ。まあ今日はな」

「はい、今日は」

「飲むか」

優しい顔を向けて彼に告げるのだった。

「とりあえずな」

「そうですね。じゃあ今日はそれでストレスを忘れます」

にこりと笑って返す剛だった。この場はこれで終わった。それで暫くして今やっている仕事が終わってからだった。彼は有給を取った。

「それで何処に行くんだ？」

「インドに」

そこに行く就先輩に答える。またあの居酒屋のカウンターで話し

ている。当然飲みながらだ。

第二章

「そこに行こうかと」

「インドにか」

「ええ。何か凄い場所らしくて」

それ選んだと答えるのだった。

「行って来ます」

「そうか。インドか」

先輩はそれを聞いて考える顔になった。そうしてこんなことを言
った。

「カレーか」

「そうですね。カレーですね」

剛も先輩の言葉に応える。それを聞いて考える顔にもなる。

「あとはナンとかですよね」

「それ何だ、つてのはまあ使い古されたネタだけれどな」

「申し訳ないですけど今のは」

「ああ、自分でもわかってるよ」

苦笑いで剛に返す。彼もわかっているのだ。チューハイを飲みな
がら応えるのだった。

「それはな」

「そうですね」

「こんな下らない駄洒落は関西だったらあれか」

「時と場合、あとと言う人によっては受けますよ」

こう述べる剛だった。

「それこそ巨人阪神とかがタイミングを見て言えば」

「やすきよだと余計にか」

「ちよつとやすきよはよく知らないんですけれどね」

それは年代的にも知らない彼だった。横山やすしも遠い昔の話だ。

「それは」

「ああ、知らないのか」

「先輩もそうなんじゃないですか？」

「子供の頃に少し見たけれどな」

彼にしてもそうなのだった。実際のところは。

「ちよつとだけな」

「ですよね。やっぱり」

「それでインドか」

ここで話が戻った。

「それにしても凄い国に行くな」

「凄いから行ってみよう」と

とにかく理由はそれだった。とにかく凄い国だからなのだった。

「どうですかね」

「生きて帰れるのかな」

不意にこんなことを言い出す先輩だった。

「インドだろ？虎やライオンや豹がいるんだろ」

「ああ、そういうえはいますね」

野生動物も豊富な国である。亜熱帯が多くそうした動物が多いのである。

「他にはキングゴブラも」

「象もいるな。あと牛が普通に街を歩き回っている」

「牛食べたら駄目なんですよね」

今度は牛の話になる。二人はここで自分達の前にある料理を見た。二人共そこに牛タンやモツを置いている。サイコロステーキまである。

「それは絶対ですよね」

「宗教的な戒律でな」

それであつた。ヒンズー教である。

「今のうちに食べておけよ」

「はい、じゃあ」

「メインは鶏肉だからな」

「僕鶏も好きですけれどね」

「じゃあそれもいいのか？」

「ええ、別に」

こう答える彼だった。

「鶏も」

「それならそれでいいな」

「はい。まあ牛肉は今のうちに食べておきます」

しかしそれはそれだった。笑顔でそのサイコロステーキを食べていく。

それとビールだった。ビールもごくごくと飲んでいる。

「ビールはありましたっけ」

「あるんじゃないのか？飲むものは紅茶でな」

「インドの紅茶ですか」

「ヨガにな。まあ色々ある国だな」

「とりあえず猛獣には気をつけます」

それは気をつけるという彼だった。

第三章

「それで行って来ます」

「ああ、楽しんで来いよ」

こんな話をしてからインドに旅立つ彼だった。インドに辿り着くとまずは褐色の肌の品のあるガイドさんに迎えられたのだった。

「ハルジャといます」

「そうですか」

「はい、宜しく御願います」

笑顔で応える彼だった。既に服はインドの気候に合わせて半袖でラフな格好である。見ればそのガイドのハルジャもそんな姿であった。

「それでは」

「まずは何を食べますか？」

「カレー、いえカレーでしたね」

「はい、カレーです」

ハルジャは微笑んで彼の今の言葉に頷いた。インドではそう呼ぶのである。

「カレーを食べますか」

「それで御願います」

「日本人らしいですね」

ハルジャは彼がカレーを頼むとにこりとなった。

「まずカレーを頼まれるとは」

「そうなのですか」

「御存知だと思えますがインドでは料理はどれもカレーです」

これはよく言われていることである。その味付け自体をカレーと呼んでいるのである。

「ですからこの場合は」

「お米にかけたカレーですね」

「そうです」

まさにそれだというのである。

「ではそれを」

「はい、それでは」

こうしてまずはそのカリーを食べる彼等であつた。店はそれなりに洒落た落ち着いた趣の店だつた。インドというよりはイギリスの感じだつた。

その白くカーテンまで西洋風で緑の庭まで見える店の中に入って、剛は少し戸惑いながらハルジャに対して尋ねるのだつた。

「あのですね」

「何か？」

「高級そうなお店ですね」

「値段は大したことありませんよ」

しかしハルジャはにこりと笑つてこう彼に返すのだつた。

「別に」

「そうなのですか」

「はい、値段はです」

大したことはないというのだつた。

「ただ」

「ただ？」

「このお店にしたのはですね」

そのことについて話をはじめてきた。

「私の方の都合でなんですよ」

「ハルジャさんのですか」

「ええ。私はヒンズー教徒です」

そのイギリス風の白いテーブルかけの席に向かい合つて座る。そのうえでナプキン等が用意されるのを見ながら話を続けるのだつた。

「それでカーストの関係で」

「カーストですか」

「はい、そうです」

それだというのだった。

「その関係で。貴方には申し訳ありませんが」

「いえ、僕のことはいいですけどね」

実際にそれはどうでもよかった。ただそのカーストの話が気になった。それであらためて彼に対してそのことを尋ねたのであった。

「ただ」

「ただ？」

「お店にも関係してくるんですね」

「はい、そうなんです」

返答はその通りだというのものだった。

「これが複雑なものがありまして」

「カーストがですか」

「他にも色々あります」

日本人にはわかりにくい話が為されるのだった。

「服装もそうですし」

「服もですか」

「あと職業は当然として」

これもあるのだった。インドのカースト制は職業分化や棲み分けにもなっているのである。それが社会の秩序にもつながっている。

あながち全てが悪とは言えないのである。

「礼儀作法にも関係してきますし」

「極めて大きなものなのです」

「はい、だからです」

あらためて剛に述べるのだった。

第四章

「それは御了承下さい」

「わかりました。それでは」

「はい」

こうした話の後でそのカレーを食べる。それは羊のカレーで日本のそれとは全く違う味であった。

そのカレーを食べてニューデリーの街を観光して終わった。それが一日目だった。

「次の日はですね」

「はい」

「ガンジス河に行きましょう」

ハルジャはこう提案してきたのだった。

「あそこにです」

「ガンジス河にですか」

「そうです。それではです」

「ガンジス河ですか」

それを聞いてあらためて考える顔になる彼だった。

「何か色々話を聞きますけれど」

「聖地です」

ハルジャはにこりとした笑みを作ってみせてきた。

「あそこはまさにそれです」

「ヒンズー教の聖なる河でしたね」

「では明日はベナレスへ」

もうハルジャの中では決まっているかの様な今の言葉だった。

「それでいいですね」

「ベナレスのカリーも美味しそうですね」

「はい、美味しいですよ」

それは笑って認める彼だった。

「あそこのカリーも」

「そうですね。やっぱり」

「ただ。寂しくはないですか？」

ハルジヤはここでこんなことを言ってきたのだった。

「寂しくは」

「寂しいといえますと」

「お酒がなくてですよ」

今度はにこりとした笑みになっていた。その笑みで言ってきたのだった。

「それで寂しくはないですか？」

「まあそれは」

「カリーはお酒には合いませんからね」

これはインド人である彼もわかっていることだった。むしろインド人だからこそこのことが余計にわかっているとも言えることだった。

「ですから」

「まあそれは我慢するつもりですけれど」

「いえいえ、我慢される必要はありません」

だがハルジヤは笑って言ってきたのだった。

「その必要はありません」

「といえますと」

「あるんですよ、これが」

笑顔と共の言葉だった。

「ちゃんと」

「といえますとー!？」

「あのですね。ビールがあります」
「それだというのである。」

「ビールが」

「そうですね。ビールですか」

「はい、インドのビールがです」

「じゃあそれを御願いできますか？」

「はい、それですね」

ビールの話を出してきてからさらにであった。彼はそのことをさらに話してきた。

「おつまみはですね」

「それは何がありますか？」

「まあ簡単に豆を焼いたものとか鶏肉とかが」

「タンドリーチキンみたいなものですか」

「そうですね。それですか」

「はい、それです」

今度はそれだった。タンドリーチキンだった。

「まあそういったもので楽しくやりましたよ」

「ええ、それじゃあ」

「インドのビールは美味しいですよ」

かなり露骨に自国の酒の宣伝もしてきた。

「それじゃあ明るく楽しく」

「それじゃあ」

こうして剛はハルジャの誘いを受けてインドのビールを飲んだ。それを飲みながら明るく楽しい夜を過ごした。そうしてその翌日は。

第五章

二人はベナレスに来た。河まで段になっていてそこから河に入るようになつていた。河の中にはもう多くの人がいて満ち足りた顔で沐浴していた。

それを見ながらだった。ハルジャが彼に声をかけてきた。

「ここがですね」

「そのガンジス河ですよね」

「はい、そうです」

まさにそこだというのだった。

「聖なる河ですよ」

「そうですか」

「ああ、こつ思われていますね」

今一つ浮かない顔の彼を見てすぐにその理由を察してきた彼だった。

「聖地というには奇麗ではないと思われてますね」

「それは」

「日本人から見ればそうでしょうね」

こつ言つてきたのだ。

「日本人から見れば」

「ちよつとそれは」

「わかりますよ」

そしてそれを肯定してきたのだった。

「私は日本に行ったことがありませんが」

「そうだったんですか」

「はい、そうだったんですよ」

ここでもにこやかな笑顔だった。その浅黒い顔から出ている歯の白さが眩しい。その白と黒の対比こそがインド人の出せる美しさであつた。

「日本だけではありませんが」
「他の国も」

「世界中を旅行したことがあります」
「そうだったというのである。」

「その時に日本も」
「成程」

「それで日本も見ましたが」
「ここでさらに話すハルジャだった。」

「綺麗な国ですね」
「綺麗なですか」

「どうです？インドは」
「インドは」

「はい、この国は」

「こう言うのだった。剛は言われてすぐ周りを見回す。すると雑多であちこちに人やものが溢れ返っている。香料や果物、野菜が雑然と並べられ物乞いの子供達が旅行者の周りに集まりそれでせびっている。そして牛達がその中を平然と歩き回っている。まさにインドの街並みだった。」

「何と言いますか」

「物凄いでしょう？」

「笑いながら剛に問うてきたハルジャだった。」

「ここは」

「ええ、それは」

「このことは剛も素直に頷けた。こう言うしかなかった。」
「もうかなり」

「日本や他の国の様に綺麗にまとまっています」
「笑顔で語る彼だった。」

「そんなことは最初から考えてもいません」

「考えてもですか」

「インドはそうです」

まさにそれこそがだというのだ。

「インドはそうなんですよ。ですからこのガンジス河も」

「そういうことですか」

「そうです。気持ちいいですよ」

その沐浴のことも話した。

「この河で身体を清めると」

「ううん、ですが僕は」

「ははは、それは言いませんから」

剛の沐浴は強制しないのだった。

「安心して下さい」

「そうですか」

「さて、それでですけど」

河から目を離してさらに言ってきた。

「街に行きますか」

「そうですね。それじゃあ」

今度はその雑然とした街の中を進む。するとそれだけでももうそのもの語彙の子供達に周りを取り囲まれる。身動きどころではなくなつてしまった。

「うわっ、これは」

「この子達はこれが仕事なのです」

「これもカーストですか」

「はい、そうです」

実に何でもないといった口調だった。

「物乞いのカーストですね」

「インドではそれもカーストですか」

「これにも驚ろかれましたか」

「ええ、かなり」

このことも正直に言葉に出した剛だった。

第六章

「これもですか」

「そうなんですよ。ですから慣れれば特に何ともなくなりますよ」

「はあ」

「まああれです」

「あれとは？」

「これがインドだと思われればいいです」

このことについてもだというのである。そうして。

その手に数枚コインを出してそれを子供達に与える。すると彼等は笑顔で去っていくのであった。

「これでいいですよ」

「それだけですか」

「はい、それだけです」

実に素っ気無い今のハルジャだった。

「これで終わりです」

「そうなのですか」

「何でしたら貴方もどうですか？」

「僕もですか」

「彼等はこれが仕事なのですから」

またこう言うのだった。所謂物乞いがそうだというのである。

「先祖代々の」

「だからこれが当然なのですね」

「そうです。如何されますか？」

「ううん、それでしたら」

少し考える顔になったがその懐から財布を取り出してだった。コインを吸うまい取り出す。税関で両替えしてルピーにしている。

そのコインを数枚子供達に渡してだ。これで子供達は笑顔で去った。子供達のことはいこれで終わったが剛はまだインドを見ていた。

彼等はそのままある寺院に向かった。そこは。

「この寺院は」

「ヒンズー教の寺院です」

そこだというのだ。石造りで門のところには象の頭をしたでっぴりと太った四本の腕を持つ像があった。それが左右に一つずつあった。同時に牛の像もある。

その像が何か剛もすぐにわかった。

「ああ、ガネーシャですか」

「御存知なのですね」

「ええ、日本でも漫画とかゲームに結構出て来ますから」

そういったもので手に入れた知識であった。

「それでなんですけれど」

「日本はそういったものが多いですね」

「はい、所謂ヲタク文化ですか？」

自分でそれを言う剛だった。

「それですけど」

「成程。インドではそういったものはまだまだ広まってませんので」

「そうですね」

「ええ。それでもガネーシャ神を御存知なのですね」

「はい、それは」

これについてはであった。彼も知っているのは確かだ。

「知ってます」

「それではですが」

あらためて話すハルジャだった。

「ここはシヴァ神の寺院です」

「あの破壊の神ですね」

シヴァについても知っている彼だった。やはりこの知識も漫画やゲームで仕入れたものである。こういったものから手に入れる知識も馬鹿にできない。

「ヒンズー教の三大神の一柱ですね」

「はい、そうです」

まさにその通りだと答えるハルジャだった。門に入ると中はがらんとしていた。何もなくてただ石の床と天井が薄暗い中に見えるだけであった。

剛はその中を見回す。そうしてそのうえでハルジャに話を続けるのだった。

「それですけど」

「それで？」

「ここはそのシヴァ神の寺院ですよね」

「はい、それでここにはですね」

また言ってきたハルジャだった。

「ある方がおられます」

「ある方といますと」

「仙人といいますが」

それだというのである。

「日本ではそう呼ぶんですかね」

「仙人ですか」

「世捨て人みたいな生活をしてですね。ここでずっと暮らしておられます」

「この寺院の中に」

「そうです。長い間一人でここにです」
暮らしているというのである。

第七章

「そうですね。話によるとですね」
「話によると?」

「インドがイギリスに支配されていた頃からここにおられたらしくて」

「といたしますと六十年以上もですか」

「九十を超えておられるそうですね」

「ハルジャは少し考えたうえで述べた。」

「いや、百歳を超えていたかも」

「百歳をですか!?!」

「詳しいことはわかりませんが」

「要するに年齢不詳というのである。」

「まあそうですね。相当な御歳でして」

「その人がここにおられるんですね」

「はい、この寺院の奥にです」

こう言つてさらに奥に進むとだった。そこに一人のみすぼらしい服を身にまとつた一人の老人がいた。浅黒いインド人特有の肌を持ち薄い白髪と髭を伸ばしたままにしている。痩せた身体をしていてその場で座禅を組み瞑想に耽つていた。その彼がいたのだ。

「この方がですか」

「はい、この方です」

その彼だというのである。

「名前はですね」

「何と仰るのですか?」

「さて」

それを言われると首を傾げさせる彼だった。

「何といったでしょうか」

「御存知ないのですか」

「あつた筈ですが御本人が然程こだわっておられないので」
「名前にもですか」

「はい。そういったものにもです」
「やはりこだわっていないというのである。」

「ですから私も知りません」

「左様ですか」

「とりあえずですね」

「はい」

「この方のお話を聞かればいいです」
「そうすればいいというのである。」

「まずはです」

「お話をですか」

「はい。ですから」

ここでその仙人に声をかける彼だった。

「あの、宜しいでしょうか」

「むっ!?!」

ハルジャの言葉に応えてだった。ふと顔をあげる彼であった。

「誰じゃ? わしを呼ぶのは」

「私です」

「おお、ハルジャさんか」

彼の話の聞くとだった。目も開ける。黒く澄んだ、その奥に何か深いものをたたえた瞳であった。その目でハルジャだけでなく剛も見てきたのだった。

「それにこちらの方は」

「日本から来られた方です」

彼のことも話すハルジャだった。

「そちらの方でして」

「日本のか。成程」

「どうも思うところがあるようでした」

剛のそうした悩みは既に察している彼だった。

「それでこちらに来られたようなのです」

「左様なのか」

「それでお話を聞きたいそうです」

「わしから話すことは何もない」

しかしであった。彼はこう言うだけだった。何もないというのである。

「特にな」

「えっ、それは」

「まずは座られよ」

何もないと言われて驚く彼への言葉だった。

「まずはじゃ」

「座るんですか」

「ハルジャさんもな」

彼もだというのである。

「座られよ」

「わかりました」

ハルジャは素直に彼の言葉に従い座った。それを見て剛も座った。

そのうえで、であった。

「話をするよりもじゃ」

「もつといいことがあるんですか」

「左様。それではじゃ」

剛に応えてまた言ってきたのだった。

第八章

「そのまま座禅をしてじゃ」

「座禅を」

「瞑想をされよ」

それをだというのだった。今度は。

「よいな。これからじゃ」

「瞑想をするとわかるのですか？」

「まずはそれをされることじゃ」

「瞑想ですか」

「宜しいかな」

彼に対して言ってきたのだった。

「ハルジャさんもじゃ」

「それでは瞑想しましょう」

それを聞いて述べたハルジャだった。剛にも顔を向ける。

「いいですね」

「わかりました。それでは」

剛も彼の言葉を受けて頷く。これで決まりだった。

こうして三人は向かい合って座って瞑想に入った。剛はその瞑想の中で感じた。

宇宙ができそれが維持され破壊される。その宇宙がまたできあがるのをだ。見たのである。

それを見届けてやがて目が自然に開いた。するとだった。

そこにいた仙人がである。言ってきたのだった。

「御覧になられましたね」

「はい」

剛は仙人の今の言葉に答えたのだった。

「見えました。あれはまさに」

「この寺院はシヴァ神の神殿です」

「このことも言ってきたのだった。」

「破壊神のです」

「破壊のですね。そうですね」

「世界は創造、調和、破壊」

「この三つを話に出してきた。」

「この三つのサイクルからなります」

「シヴァはその破壊を司っていますね」

「それは悪ではありません」

仙人の言葉は穏やかだった。言葉をそのまま彼の心に滲み入らせる感じだった。

「破壊から創造があるのですから」

「それはわかります」

「頭でわかりそうしてです」

「また言う仙人だった。」

「感じることなのです」

「その為に瞑想なのです」

「その三つのサイクルを感じてこそです」

「また言う彼女だった。」

「全てが見えるのです」

「全てが」

「人の世はこの宇宙の三つのサイクルの中にあります」

「仙人はさらに言ってきた。」

「その中の些細なものです」

「些細なですか」

「そうですね、些細なものです」

「ちっぽけなものだと。そうだといいのだ。」

「ほんのです」

「そういったものですか」

「ですから。御気に召されるものではありません」

「まさか僕が」

「疲れておられましたね」

それを見抜いていたというのである。今の言葉はまさにそうであった。

「生きていることに」

「まあそうです。仕事にはです」

「そうですね。ですがそれは宇宙の中の人の世でのそのさらに人の人生の中の僅かな部分に過ぎないのです」

まさにそうでしかないというのだ。そこまで些細なものだと。

「そしてその宇宙もです」

「神の一日に過ぎませんでしたね」

「そうした中での些細なことにもなりません。そして」

「そして」

「それは終わるものです」

そうだともいうのであった。仙人の言葉は何処までも遠大であった。

「はじまりがあるからには」

「では僕の今のこれは」

「悩まれるものではありません。ただその身を任せていればいいのです」

「そうなのですか」

「はい。これでおわかりでしょうか」

ここまで話したうえでの言葉だった。

「これで」

「はい、これで」

仙人のその言葉に頷く剛だった。その顔が晴れやかなものになっていた。

「わかりました」

「それではこれで宜しいですね」

「はい」

あらためて頷く彼だった。

「これで」

「では後はですね」

話が終わったところでハルジャもまた言葉を出してきた。

「これで帰りましょう」

「はい、それでは」

こうして仙人に別れの挨拶をして場を後にする二人であった。寺を出るとその門のところに牛がいた。インドの白い牛である。

牛を見るとだった。ふと気付いた彼である。

「ああ、あの牛は」

「ええ、門にいますよね」

「はい、牛はシヴァ神の乗り物ですから」

「悠久の中にあるのですね」

今はこのことを感じた彼だった。

「人と同じで」

「ありとあらゆる存在がです」

そうなっているというのである。

「ですからその中で漂っていればいいのです」

「悠久の時に身を任せてですね」

「はい、それでは」

「行かせてもらいます」

こう言っただけであった。穏やかな顔で足を出した。彼は今はもう疲れを感じることはなかった。悠久の中に身を漂わせることを知ったからである。

悠久の仙人 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1731/>

悠久の仙人

2010年10月8日15時22分発行